

50年がかりで、やっと出来た新作『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』の完成上映会、プレス・関係者試写会に取り組んでいるところです。

産み落とした我が子を、可愛い子だね、と誉めてくれる人もいれば、気に入らない顔をして引き上げていく人もいる…いつものことだけど。

今回はいつもに増して迷いに迷いながら、やっと頂上にたどり着いた感があるんだ。

50年、夢中で生きてきた奈緒ちゃんとお母さんの日々を、夢中で見守ってきた記録だから、そう冷静にまとめられるわけがないよね…。

居直って言えば、上手に程よくまとまった映画にならなくてヨカッタ、と。きっと上手くまとまった映画になっていたら、自分で自分に嘘をついているような気持ちになるような気がしてならない。

私の姉でもある、奈緒ちゃんのお母さんが「終活」を始めたのを知ったのが、今回の映画を撮り始める直接のキッカケだったのですが、自分にとっても、この映画は「終活」でもあるのかもしれないと思わないでもない。

映画創りに手を染めて50年ということもあるし、昨年「がん」の手術をしたりカラダのあちこちに不具合が出たりしてるからね…。

試写を観てくれた知人に「もうこれが遺作になるかも知れないから応援してよ…」と言ったら、「伊勢さん、そおいうのを遺作詐欺って言うんですよ。で、きっとまた次も創るんでしょ？」と言われてしまったけど。

いずれにしても、私は自分自身の人生をしっかり受け止めて、上手くまとめることなど出来ないということだ…と映画が完成してから思うようになった。それでいい…とも。トリトメノナイ人生を生きただ奴は、トリトメノナイ人生を振り返る。それが正直でいいと…。

評論家的な方々が、映画の出来をウンヌンする評価よりも、普通のオジサン、オバサン、

ニイチャン、ネエチャン、ジイサン、バアサンが、笑って、泣いて、怒って、ふと自分の人生を振り返ったりしてしまう、「窓」というよりも「鏡」のような映画であってほしい。

トリトメノナイ人生を生きる一人ひとりが、共感するような、そんなトリトメノナイ映画として受け止めてもらえたら嬉しいのだ。

しかし、我ながら、よくぞ50年もこりずに、飽きずに、撮り続けたと思う。撮られ続けた奈緒ちゃん、お母さん、お父さん、弟の記一も、よく嫌な顔ひとつせず（ちょっとはしたか？）協力してくれた。撮影から、仕上げ、さらに上映活動に関わってくれたスタッフの一人ひとりも、よく嫌な顔をせず（けっこうしたかも？）付き合ってくれた。

そして、今回は三百人を越える方々が、製作支援カンパを寄せてくれた…そのお力添え抜きに、映画は出来なかったと思う。

映画は一人では出来ないのだ…。  
大きな声で「ありがとう」と言いたい。

「長くは生きられない」と言われていた奈緒ちゃんが50年生きた…。  
で、今も元気一杯の奈緒ちゃんが語りかける。

「今、何時？ まだ早すぎる」  
「やさしくなあにって言わなくちゃ」  
「人生まだまだ…」

この映画は、  
姉の「終活」でも、  
私の「終活」でももちろんなく。  
過去の記憶というよりも  
現在と未来への記憶を、  
奈緒ちゃんが語りかけている物語なのだと思う。

月齢十日の月が、  
じっと私たちを、見守ってくれている。